様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成　２５　年　６　月　１９　日現在

機関番号：２６４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：２０１１年度　～２０１２年度
課題番号：２３６５３２７１
研究課題名（和文）
離職者を対象とした介護福祉士養成教育における成人学生の学びの構造
研究課題名（英文）
The structure of adult students' learning in the training programs for the unemployed to become a certified care worker
研究代表者
宮上　多加子（MIYAUE　TAKAKO）
高知県立大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：９０２５９６５６

研究成果の概要（和文）：
本研究では、多様な介護人材確保対策の中から、離職者を対象とした介護福祉士養成事業を取り上げ、社会人学生が介護を学ぶ過程における変化と関係する要因について分析した。学生は介護の理念や技術を学ぶことには抵抗感が少なく、学習や実習の中で自身の持つ社会経験や資質を活用しようとしていた。しかし、学生と教員にとっては事業を活用する上での負担が大きく、また入学時の選抜と卒業時の進路選定に関して課題が多かった。

研究成果の概要（英文）：
Among diverse measures to secure care workers, this research deals with the training programs for the unemployed to become a certified care worker. We analyzed the change of adult students by learning care and the related factors.
Students had less scruples of learning care principle and skills, and tried to utilize their social experience and qualities in learning and practical works. But the program put a great burden on those students and their teachers, and there were many problems with the selection of students at entry and their career choice at graduation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	１，１００，０００	３３０，０００	１，４３０，０００

研究分野：介護福祉学
科研費の分科・細目：教育学・教育社会学
キーワード：介護福祉士、養成教育、職業教育、離職者、学び、キャリア

１．研究開始当初の背景
高齢化に伴う介護人材の不足と同時に、近年の景気と雇用情勢の悪化という社会状況を背景として、平成 21 年度から離職者に対する再訓練事業の中での介護福祉士養成や、介護事業所に所属しながら介護福祉士養成校で学ぶ介護雇用プログラム事業が開始された。これらの事業実施に伴い、介護福祉士養成校に多くの成人学生が在籍することになり、生涯教育の視点に立った成人への教授方法を工夫する必要が生じていると考えられる。しかし、介護福祉士養成教育は、専門職教育としての歴史が浅く、多様な背景と資質を持つ成人学生の学習ニーズに対応した教育体制が構築されていない。

２．研究の目的
本研究の目的は、介護福祉士養成校に入学した成人学生を対象として、集合的学習や介護現場における経験の意味づけを探り、介護および職務に対する認識の変容過程と関係する要因を明らかにすることにより、介護福

祉教育のあり方を検討することである。具体的な研究課題は、以下の 3 点である。

(1)介護福祉士養成校に入学した成人学生は、養成校における学習と介護現場における経験等を経て、介護と職業に関する認識がどのように変容していくかについて、そのプロセスおよび関係する要因を明らかにする。

(2)介護福祉士養成校の教員および事業の行政担当者は、成人学生に対してどのような学習支援を行い、成人学生がどのように変化したと認識しているのか、また学習支援における課題は何かについて明らかにする。

(3)離職者を対象とした介護福祉士養成事業の成果と将来的な課題について検討する。

３．研究の方法

研究課題を達成するために、以下の 4 つの調査を実施した。

(1)成人学生に対する調査

中国四国地区の介護福祉士養成校 8 校に対して調査対象者の選定を依頼し、平成 23 年 8 月～11 月にかけて離職者訓練事業の学生 17 人、介護雇用プログラム事業の学生 18 人に対して個別面接調査を行った。また、平成 24 年 8 月～9 月には、離職者訓練事業の学生 6 人、介護雇用プログラム事業の学生 3 人に対して追加の個別面接調査を行った。得られたデータは逐語録としてまとめ、MAXqda を用いてコード化及びカテゴリー生成作業を行った。

(2)卒業生に対する調査

介護福祉士養成校の教員を通して、離職者訓練事業および介護雇用プログラム事業を活用した卒業生の中から福祉施設等に就職している介護職員 8 人の紹介を受け、面接調査を行った（平成 24 年 8 月～9 月）。得られたデータは逐語録とし、MAXqda を用いてコード化及びカテゴリー生成作業を行った。

(3)介護福祉士養成校教員に対する調査

中国四国地区の介護福祉士養成校 11 校(17 人）の教員に対して面接調査を実施した（平成 23 年 8 月～10 月)。得られたデータは逐語録とし、MAXqda を用いてコード化及びカテゴリー生成作業を行った。

(4)行政担当者への調査

四国内 2 県の行政機関等合計 8 ヶ所の介護人材養成事業担当者に対して聞き取り調査を行った（平成 24 年 7 月～10 月)。得られたデータは、質的記述的に分析を行った。

(1)～(4)の調査データを分析するとともに、各々の調査結果について複合的に検討を行った。

４．研究成果

(1) 離職者訓練事業及び介護雇用プログラム事業を活用している社会人学生の学びの過程における変化の様相を明らかにすることを目的として、中国四国地区にある介護福祉士養成校に在籍している離職者訓練事業の学生（以下、訓練生という）と介護雇用プログラムの学生（以下、プログラム生という）に対して個別面接調査を実施し、データを質的帰納的に分析した。本稿における分析では、予備調査として平成 22 年度に行った面接調査結果を含めて、訓練生 23 人、プログラム生 24 人のデータを分析に用いた。

社会人が集団的な教育の場で学ぶという経験については、「久しぶりの勉強で感じる苦痛」というカテゴリーにあるように、苦手意識や苦慮している様子がみられる。しかし、介護を学ぶことについては、訓練生及びプログラム生ともに主体的に学ぶ姿勢があり、特に養成校で学ぶ介護の基本と現場の実践について、その差異を認識しながらも、自分なりに関係づけや調整を図ろうとする姿勢は共通していた。教育内容そのものについての不満はデータの中には見いだせず、コードからは「今まで知らなかった分野の新鮮な知識を得る」という捉え方が読み取れる。

図１　訓練生の学年による変化

項目	カテゴリー
養成校入学に至る過程	介護を考えた時タイミング良く事業を紹介される
	応募前の躊躇や葛藤
	入学前の周囲の反応
学びの場に馴染む過程	ユニークな存在が学校に馴染んでいく
	久しぶりの勉強で感じる苦痛
	社会人の持つ強みはコミュニケーション力と生活者としての技術
実践的な学びの場に馴染む過程	実習のしんどさと仕事の相違
	自分の職業経験を通して介護現場をみる
	実習で関わり方と介護の基礎を学ぶ
学びによる内面的な変化	介護を学ぶことで価値観と人の捉え方が変化した
	学校の授業内容と現場のケアの自分なりの調整
	介護を学ぶ経験の意味づけ
	介護することに意欲を持つ
	自分に合った現場を志向

１年生と2年生で内容に違いがあるカテゴリー

訓練生は、養成校における学業に専念できる立場であるため、【養成校入学に至る過程】【学びの場に馴染む過程】【実践的な学びの場に馴染む過程】【学びによる内面的な変化】という 4 つの局面において比較的スムーズな変化の様相を見せており、「社会人の持つ強みはコミュニケーション力と生活者として

の技術」というカテゴリーに表現されるように、自らの持つ資質を養成校における学習や実習の場で活用しようとしていた（図 1)。

1 年生から 2 年生への変化については、【実践的な学びの場に馴染む過程】と【学びによる内面的な変化】において、1 年生よりも 2 年生に多くのコードがあったことから、これらの内容の変化には比較的多くの時間がかかると言える。また、カテゴリーの内容から、【学びによる内面的な変化】には、養成校内での学びと実習での学びの双方が関係していると考えられた。

一方、介護雇用プログラム事業の学生は、離職者である成人という点では訓練生と共通であるが、プログラム生は各自が介護事業所に所属し、祝日や長期休暇の時期などは介護職員として働いている点が訓練生と異なっている。このような状況から、図 2 に示すように【学校の授業と現場のケア】では、養成校内での学びと現場のケアを結び付けようと試みており、また「大人が学ぶための工夫」というカテゴリーが加わっていた。これは、働きながら学ぶという時間的に厳しい状況に置かれている社会人学生の工夫であると考えられる。

図 2　プログラム生の学年による変化

項目	学年	カテゴリー
学校の授業と現場のケア	１年	学校の授業内容と現場のケアの自分なりの調整
	２年	介護の基本と実践を結び付けようと試みる
		大人が学ぶための工夫
社会人力	１年	社会人の持つ強みはコミュニケーション力と生活者としての技術
	２年	社会人としての強みを活用
学ぶことによる変化	１年	介護を学ぶことで価値観と人の捉え方が変化した
	２年	学ぶことによる認識の変化を実感する
職場でのプログラム生の存在	１年	現場でプログラム生として動けるまでの時間
		プログラム生が職員として現場に入る際の軋轢
	２年	職場で主体的に動く工夫をする
		職場では中途半端な立場で不自由
介護現場の捉え方	１年	自分の職業経験を通して介護現場をみる
	２年	介護の現場を「職場」としてとらえる
実習に対する姿勢	１年	実習と仕事では立場や視点が異なる
	２年	実習で意欲的に学ぶ
キャリアの指向性	１年	自分に合った現場を志向
	２年	キャリアパスを考えて働き方を選ぶ

１年生と２年生で相違のあったカテゴリー

【職場でのプログラム生の存在】では、所属する介護事業所での職員としての立場があり、２年生になって職場での仕事に慣れて自分の判断で動けるようになっている反面、非正規雇用という立場であったり、他の職員に比べて情報伝達や業務内容に違いがあったりすることから、介護の学びによって得た知識や技術を使った動き方が制限される矛盾が生じていた。また、【実習に対する姿勢】では、１年生の時点での実習の厳しさやとまどう体験を乗り越えて、主体的に学ぶ姿勢が加わっていた。

さらに、プログラム生には「実習と仕事では立場や視点が異なる」「実習で意欲的に学ぶ」という経験を通した学びのカテゴリーがあるが、プログラム生の所属する職場での経験と介護の学びとを結びつけるデータはなかった。つまり、プログラム生の職場での経験が学生自身の学びとして活かされていない点は人材養成教育としての課題であると考えられる。

以上の結果から、社会人の持つ資質と特徴に配慮した教授法の工夫や、養成校での学習と介護実践を通した学びとを効果的につなぐ必要があることが示唆された。

(2) 離職者訓練事業及び介護雇用プログラム事業を活用して介護福祉士資格を取得し介護現場に就職した社会人は、職業経験を通して、介護に対する認識や仕事の信念をどのように変容させているのかを明らかにすることを目的として調査を行った。

四国内の介護福祉士養成校を卒業後、介護現場に就職した離職者訓練修了生 2 人および介護雇用プログラム修了生 6 人に対して個別面接調査を実施し、データを質的帰納的に分析した。得られたコードは 46、コードをまとめて生成したカテゴリーは 11 であった。

カテゴリーの内容は、「介護という職業を選びとる」「責任を持って職務を遂行する意識」「職場で自分の信念を通す方法」「信念を持ってケアする」「業務における満足感や達成感」「利用者主体か業務優先かの選択」「現場でしか学べないことがある」「介護において自身のキャリアを描く」「職場における人間関係の重要性」「介護の業界としての課題」「事業としての課題」である。

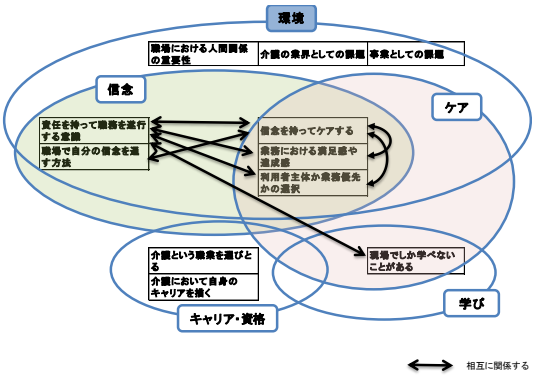
11 のカテゴリーの位置づけと相互の関係について、カテゴリーに属するコードをもとに検討した結果、【環境】【信念】【ケア】【キャリア・資格】【学び】の 5 項目に分類された（図 3）。 また、「責任を持って職務を遂行する意識」は、「信念を持ってケアする」「業務における満足感や達成感」「利用者主体か業務優先かの選択」「現場でしか学べないことがある」の 4 カテゴリーと相互の関係があり、「信念を持ってケアする」は、

「職場で自分の信念を通す方法」「業務における満足感や達成感」「利用者主体か業務優先かの選択」の 3 カテゴリーと相互の関係にあると考えられた。

「利用者主体か業務優先かの選択」は、介護業務を遂行する上で仕事の信念に最も関係が深いと考えられるが、このカテゴリーと「職場で自分の信念を通す方法」とは、コードの内容からみて直接の関係がなかった。これは、就職後半年足らずで、仕事に慣れることに懸命になっている時期であることがひとつの要因であると考えられる。特に、データの具体的な内容をみると、利用者とゆっくり関わる時間、利用者の背景を理解する時間的余裕、丁寧な介護技術を行う時間などのように、共通しているのは「時間の少なさ」であり、これは新人介護職の個人的な対応だけでは解決しない組織的な課題であると考えられる。

このように、【環境】【信念】【ケア】の 3 項目が重なる位置にある 3 カテゴリーのうち、「信念を持ってケアする」「利用者主体か業務優先かの選択」は、介護に対する認識を構成する重要なカテゴリーであることが示唆されたが、仕事の信念と実践との結合を阻害する要因として利用者に関わる時間の少なさがあり、職場環境として体系的な課題があった。

図 3　卒業生の介護についての認識



(3)離職者を対象とした介護人材養成事業を受託している中国四国地区にある介護福祉士養成校教員 17 名に面接調査を実施し、質的記述的な分析方法を用いて、離職者を対象とした介護福祉士教育の課題や教員の認識について明らかにした。

養成校教員は、社会人学生受け入れ前は、一般学生に与える影響などについて未知数であり不安が強かったが、実際に社会人学生にかかわることで、一般学生に与えるプラス面を認識していた。

このような教員の認識の変化は、社会人学生の社会人経験が介護を学ぶうえで役立つことを実感するとともに、社会人受け入れによるマイナス面以上に、介護人材を育てたいという教員の強い思いが存在するためであると考えられた。

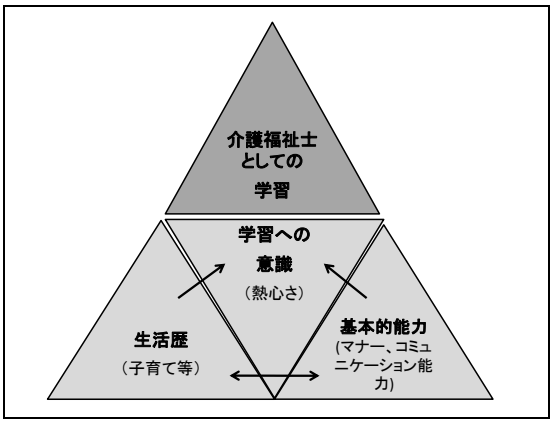
教員が行っている社会人学生への教育上の工夫や配慮については、「社会人学生の自己覚知を促している」「満足できる教育内容に工夫している」「健康面への配慮を行っている」「社会人学生所属の事業所と必要に応じて連携を図っている」「関係行政機関が担うべき内容については、関係行政機関の担当者に働きかけている」があった。

多様な背景と資質を持つ社会人学生に介護教育を行うことは、養成校だけでは解決できない課題があり、教員は様々な教育上の工夫や配慮を行っていることが明らかになった。

養成校教員だけでは解決できない課題については、「社会人学生の選定方法」「関係行政機関との連携」「訓練事業とプログラム事業の待遇の差」が明確になった。

介護人材確保については、制度政策面を含めて多面的な対策が必要となる。離職者対策における介護福祉士養成においても、養成校だけでなく、それらを担当している関係行政機関や社会人学生の所属先事業所、実習先である施設・事業所の理解や協力、連携が必要であると考えられた。

図 4　養成校教員の社会人学生に対するイメージ



(4) 社会人学生への面接調査にて得られたデータから、離職者訓練事業および介護雇用プログラム事業の課題について述べられたデータを抽出して分析を行った。用いたデータは、中国四国地区にある介護福祉士養成校に在籍する訓練生 14 人、プログラム生 24 人の合計 38 人への個別面接調査によるものである。また、四国内 2 県の介護人材養成担当（県、市町村）5 部署、ハローワーク 1 カ所、職業能力開発校 2 校について聞き取り調査を

実施し、結果について、成人学生の立場からの課題との比較検討を行った。

成人学生のデータから得られたコードは43、コードをまとめて生成したカテゴリーは12であった。 カテゴリーの内容は、「事業利用者に必要な情報を提供できていない」「入学時の選定方法を改善してほしい」「社会人としてプレッシャーを感じる」「プログラム事業と訓練事業の待遇の違い」「事業の運用方法を統一してほしい」「学業と仕事（家庭）の両立の大変さをわかってほしい」「所属先で勤務継続か否か不明瞭」「養成校での学生としての微妙な立場」「職場でのあいまいな立場」「養成校での学びと介護現場のケアのギャップにストレス」「介護事業所と養成校のパイプ役がほしい」「行政担当者の姿が見えにくく不満」であった。

関係行政機関における事業の現状や課題について聴取した意見をまとめると、行政（県、市町）からは、「募集期間が短い」「面接で本質を見抜くには限界がある」「現場で資格取得を目指すものと比較し不公平感がある」「途中でやめる学生の理由は書類上で把握している」「資格取得率や就職率は高いと評価」であった。ハローワークからは、「志望動機は大切」「事業利用学生の意識に疑問」「他分野と比較し就職率が高い」であった。職業能力開発校からは、「仕事の特性から面接試験は必要」「面接で本質を見抜くには限界がある」「事業利用者は学生ではなく訓練生」であった。

社会人学生、関係行政機関担当者共に、入学時の選定方法に課題を感じていた。関係行政機関は両事業の成果を資格取得率や就職率でおおむね良好と判断しており、その点について社会人学生とは異なる認識が明らかとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

（1） 田中眞希、宮上多加子、離職者を対象とした介護人材養成教育に対する教員の認識、介護福祉教育、査読有、18（2）巻、2013、pp 未定

（2） 宮上多加子、田中眞希、介護福祉士養成教育における社会人学生の学びのプロセス－離職者訓練生と介護雇用プログラム生の学年による変化－、中国・四国社会福祉研究、査読有、第２号、2013、pp13－29

〔学会発表〕（計３件）

①田中眞希、離職者を対象とした介護人材養成教育の現状と課題、第 20 回日本介護福祉学会大会、2012 年９月 22，23 日、京都

②宮上多加子、介護福祉士養成教育における社会人学生の学びのプロセス－離職者を対象とした介護雇用プログラム生の学年変化－、第 19 回日本介護福祉教育学会大会、2012 年９月３，４日、神戸

③宮上多加子、介護福祉士教育における社会人学生の学びの構造－離職者訓練生の学年による変化－、日本社会福祉学会中国・四国地域ブロック第 44 回大会、2012 年７月７日、岡山

６．研究組織

(1)研究代表者

宮上　多加子（MIYAUE　TAKAKO）
高知県立大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：９０２５９６５６

(2)研究分担者

田中　眞希（TANAKA　MAKI）
高知県立大学・社会福祉学部・助教
研究者番号：６０３６８８５０